

「輞川集」に關する二三の問題（上）

——裴迪同詠はなぜ稚拙か——

内 田 誠 一

一、序

王維が裴迪とともに、輞川莊の景勝を詠じた「輞川集」。この「輞川集」を、王維の他の韻文作品から際立たせている所以は、二十首連作であること、そして二十首それぞれに裴迪同詠が付けられていることである。輞川の地で詩畫の創作と信仰に勵んだ王維にとって、この作品は特別な感慨が込められたものにちがいない。一方裴迪は、まさにこの「輞川集」によって己が詩名を文學史に留めているわけで、彼にとってもまた格別の作品と言えるだろう。

しかしながら、この裴迪同詠を通讀して感ずることは、王維詩の模倣に終始している作品が極めて多いということである。同一の「詩語」を多用したり、同一乃至は類似の事柄を

詠ったりすることが多い。このような模倣に墮した稚拙とも言える裴迪の詩を、なぜ王維は自らの詩と組み合わせたのであるうか。本稿では、今までやや等閑視されてきた感のある裴迪同詠について考察してみたい。

二、裴迪同詠における王維詩の模倣

まず、裴迪同詠が王維の詩をどのように模倣しているのか、確認しておきたい。以下、裴迪同詠の王詩模倣例を具體的に見ていくことにする。なお、へゝ内の起・承・轉・結はその詩句の所在を示す。

（1）同一の詩語を用いる例

「宮槐陌」

王維：仄徑蔭宮槐、
起

裴迪：門前宮槐陌、
起

中國詩文論叢 第二十三集

「臨湖亭」

王維：當軒對樽酒〈轉〉

裴迪：當軒彌滉漾〈起〉

「南垞」

王維：北垞森難卽〈承〉

裴迪：清波殊森漫〈結〉

「宮槐陌」で、王維が「仄徑 宮槐に蔭はる」と詠んでいるにもかかわらず、裴迪は起句に詩題の「宮槐陌」を詠みこんでいる。また、「臨湖亭」では王詩の「當軒（軒に當たる——窓の方を向く）」を、裴迪がそのまま用いており、「南垞」では王維が「森」と詠うと、すかさず「森漫」と詠っている。裴迪同詠には、別の景勝を詠った王詩の詩語を用いる例もある。

王維：吹簫凌極浦〈起〉

裴迪：瀨聲喧極浦〈樂家瀨〉〈起〉

「極浦」は『楚辭』「九歌・湘君」に「望涔陽兮極浦、橫大江兮揚靈（涔陽の極浦を望めば、大江に横たはりて靈を揚かす）」と見える。この遠きみぎわを表す詩語「極浦」は王維が好んで用いる詩語である。次に王詩における用例を挙げる。

坎坎擊鼓、魚山之下。吹洞簫、望極浦。

〔魚山神女祠歌 迎神曲〕

幾往返兮極浦、尚徘徊兮落暉。〔雙黃鸝歌送別〕

惆悵極浦外、迢遞孤煙出。〔和使君五郎西樓望遠思歸〕
 高城眺落日、極浦映蒼山。〔登河北城樓作〕
 日ごろから王維に學んでいた裴迪は、「樂家瀨」同詠において、王維の好む詩語を知らず識らずのうちに用いたのだろうか。

(2) 同一ないしは類似の事柄・題材を詠う例

「孟城坳」

王維：新家孟城坳、古木余衰柳。

來者復爲誰、空悲昔人有。

裴迪：結廬古城下、時登古城上。

古城非疇昔、今人自來往。

起句では、兩者とも古城の址に家を建てたことを詠っており、また後半部分ではいずれも、古城址に立って時間の流れに想いをはせている。ただ、王維は後半で、「來者は復た誰と爲す、空しく悲しむ昔人の有」と去來今の重層的な感懷を述べているのに對して、裴迪は單純な事實を述べるのみである。これについては、入谷仙介博士の『王維研究』に同様の指摘があるので詳述しない。

「漆園」

王維：偶寄一微官、婆娑數枝樹。〔轉・結〕

裴迪：今日漆園遊、還同莊叟樂。〈轉・結〉

兩詩とも、漆園における気ままなひとときを、莊子の生き方にたとえている。

「鹿柴」

王維：空山不見人、但聞人語響。〈起・承〉

裴迪：日夕見寒山、便爲獨往客。〈起・承〉

いずれも、「空山」「寒山」と、ひとけの無い寂しい山の氣配から詠い起こす點で共通している。裴迪はさらに「見」の字まで王維の眞似をして使うという徹底ぶり。ただ、王維が承句で、視覚から聽覺へと感覺の集中を移行させているが、裴迪は「便ち獨往の客と爲る」と詠い、平板な展開に終わっている。王維の詩に、「獨往客」は一つ、「獨往」は二つ、それぞれ用例がある。

素是獨往客、脫冠情彌敦。

〔同廬拾遺韋給事東山別業二十韻 給事首春休沐維已陪

游及乎是行亦預聞命會無車馬不果斯諾〕

興來每獨往、勝事空自知。〔終南別業〕

前山景氣佳、獨往還惆悵。〔留別崔興宗〕

『莊子』在宥篇に「出入六合、遊乎九州、獨往獨來、是謂獨有（六合に出入し、九州に遊び、獨往獨來するを、是れ獨有と謂

「輞川集」に關する二三の問題（上）（内田）

ふ）とあり、また謝靈運の「入華子崗 是廡源第三谷」に「且申獨往意、乘月弄潺湲（且らく獨往の意を申べ、月に乘じて潺湲を弄ぶ）」とある。莊子や謝靈運を好んでいた王維は、このあたりをふまえて用いているのであろう。「同廬拾遺韋給事東山別業二十韻」は王維が右拾遺時代の作である。よって輞川集同詠制作時に、裴迪がこの詩を學んでいた可能性も低くはあるまい。なお裴迪は「鹿柴」以外に、「金屑泉」においても「獨往事朝汲（獨往 朝に汲むを事とす）」とこの詩語を用いていることを付記しておく。

「木蘭柴」

王維：秋山斂余照、飛鳥逐前侶。〈起・承〉

裴迪：蒼蒼落日時、鳥聲亂溪水。〈起・承〉

「柳浪」

王維：倒影入清漪。〈承〉 裴迪：映池同一色。〈起〉

「樂家瀨」

王維：淺淺石溜瀉。〈承〉 裴迪：瀨聲喧極浦。〈起〉

いずれの詩においても王維が詠んだ題材（すなわち「木蘭柴」では落日と鳥、「柳浪」では池の水面に映る影、「樂家瀨」では水音）をそのまま詠じている。他に詠むべき題材は無かったのだろうかと思われるほどである。

(3) 同一ないしは類似の表現・發想を用いる例

「欽湖」

王維：湖上一廻首、山青卷白雲。〈轉・結〉

裴迪：艤舟一長嘯、四面來清風。〈轉・結〉

「辛夷塢」

王維：木末芙蓉花、山中發紅萼。〈起・承〉

裴迪：況有辛夷花、色與芙蓉亂。〈轉・結〉

「欽湖」では、「一（ひとたび）」という共通の表現を用いて舟の上での行動を詠い、結句では兩者とも、その時の自然の有様を描寫する。「辛夷塢」では、兩詩ともモクレンの花を芙蓉の花に喩えるという發想において共通する。

「北垞」

王維：逶迤南川水、明滅青林端。〈轉・結〉

裴迪：每欲采樵去、扁舟出菰蒲。〈轉・結〉

王維は「逶迤たり南川の水、明滅す青林の端」と、くねって流れる輞水が青々とした林のかなたに見え隠れする様子を詠う。すると裴迪は、すかさず「毎に樵を採りに去かんと欲し、扁舟 菰蒲を出づ」と、たきぎを刈りにゆく小舟が、マコモの生えた水ぎわからひょっこり顔を出した様子を詠う。兩詩の後半部分は、視覺的な面白さや對象の一瞬の動きを捉

えるという表現方法において共通している。

「竹里館」

王維：深林人不知、明月來相照。〈轉・結〉

裴迪：出入惟山鳥、幽深無世人。〈轉・結〉

裴迪の「幽深にして世人無し」は、王詩の「深林 人知らず」の單純な言い換えである。また、竹里館を訪れるのは人間以外のもの（王詩では「明月」、裴詩では「山鳥」）だけであるという發想・表現の類似が見られ、ここでも裴迪が王詩の發想を模倣していることは明らかである。

(4) 「輞川集」以外の王維の詩句を模倣した例

王維：澗芳襲人衣、山月映石壁。〔藍田山石門精舍〕

裴迪：雲光侵履跡、山翠拂人衣。〔華子崗〕〈轉・結〉

「雲光侵履跡」は「山月映石壁」を、「山翠拂人衣」は「澗芳襲人衣」を、それぞれ踏まえて作られたものと考えられる。王詩では月光が石の壁を照らしているが、裴詩では雲間から漏れ出る陽光が足跡を照らし覆っている。また王詩では谷川の花の香りが衣服に染み込むさまを、裴詩では山の翠（の氣）が衣服を蔽うさまを、それぞれ詠っているが、自然の植物が人の衣服に及ぼす作用に着眼している點で一致する。⁽³⁾

この同詠では、王維が華子崗から見た情景や華子崗を散策

する心情を詠んでいるのに對して、裴迪は家に戻ってからの回想を詠じている。珍しく王詩の鸚鵡返しになっていないのは注目すべき點であろう。

王維：隨意春芳歇、王孫自可留（「山居秋暝」）

裴迪：綠堤春花合、王孫自留翫（「辛夷塢」）

王維の「隨意春芳歇、王孫自可留」は『楚辭』『招隱士』の「王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋」（王孫 遊びて歸らず、春草生じて萋萋たり）をふまえていよう。では裴迪の「綠堤 春花合し、王孫 自ら留まり翫ぶ」はどうか。勿論、王維と同様に『楚辭』『招隱士』をふまえたものとも考えられようが、氣になるのは、「留」の字である。裴迪の「自留翫」は王維の「自可留」を模倣したものかもしれない。とするならば、裴迪は王維を通して『楚辭』の句を取り入れていることになる。

三、裴迪同詠に對する評價

本稿ではこれまで裴迪同詠を精査して、裴詩は王詩の模倣に終始しているものと確認できた。さらに、その模倣の度合は尋常なものではない、と客觀的に判斷されよう。書法に譬えれば、臨書ではなく雙鉤填墨のようなものである。ではなぜ裴迪は、これほどまでに王維の詩をなぞらねばなら

なかったのだろうか。それは、少なくとも「輞川集」同詠制作時において、自己の創意に據る作品を生み出す能力に缺けていたからだと言わざるを得ない。

勿論、模倣と言っても、王維の詩風を真似て、眞を亂すほどの作品を創ることができるのであれば、それはそれで立派な詩人と言えるだろう。だが、残念ながら裴迪同詠は表面的な單純模倣に終わっている。前人はこの「仿王詩」をどのように評價していたのであろうか。

南宋・馬端臨の『文獻通考』卷三三二には「嘗與裴迪同賦各二十絕句。集中又有與迪書。……（中略）……余每讀之。使人有飄然獨往之興。迪詩亦佳。然它無聞於世。蓋亦高人也（嘗て裴迪と共に各おの二十の絶句を賦す。集中に又た迪に與ふるの書有り。……（中略）……余 毎に之を讀む。人をして飄然獨往の興有らしむ。迪の詩 亦た佳なり。然れども它 世に聞こゆる無し。蓋し亦た高人なり。）」とある。注目すべきは、「迪詩亦佳。然它無聞於世」の部分である。裴迪の詩も王維と同様よくできているのに、（どうしたものか）世間で騒がれない、と訝しんでいる。直後の「蓋亦高人」をその疑念と關係付けて考えると、「思うに、裴迪もまた王維と同様に（世俗を超越した）高人であったので（その作品は俗耳に入りにくいので）あろう」

中國詩文論叢 第二十三集

と言っているようにもとれる。しかし、具體的には何も觸れられていない。

南宋の劉須溪はその『唐王右丞集』で、裴迪の「孟城坳」同詠を「未爲不佳、相去甚遠（未だ佳ならずと爲さざれど、相ひ去ること甚だ遠し）。」と評し、「椒園」同詠については「壞盡一鍋羹（一鍋の羹を壊し盡くす）」と酷評している。

一方、王維を尊崇した清の王士禎は、偉大なる王維がつまらない作品を自作とあわせるはずがない、という思い込みからか、『唐人萬首絶句選』凡例において「盛唐王裴輞川唱和、工力悉敵。劉須溪有意抑裴、謬論也（盛唐の王・裴の輞川唱和、工・力悉く敵ふ。劉須溪 意有りて裴を抑ふるは、謬論なり）。」と劉説を否定している。

いま試みに前人の詩評から三者を選んで挙げたが、前人の裴詩への言及の多くは具體性を缺いており、漠然とした印象批評の範圍を越えていないようである。

最近の王維研究家の評價はどうであろうか。入谷博士『王維研究』第十三章「輞川」では、「裴迪には一本立ちの詩人たる力量が缺けていた」ため、「王維とまともに比較されたのでは裴迪が氣の毒」であるとする。そして「裴迪の幼稚さ」は「フィクション性の未熟さ」であり、「輞川集」のいくつ

かの作品では、「王維の作が全く幻想であるのに對し、裴迪の作は現實的」で、「イマジネーションを王維のように豊富にふくらませることができなかったために、現實的な印象を與えるに至った」と指摘している。

王・裴の優劣を詳細に検討した論文に、師長泰「實做有盡虛做无博——《輞川集》王、裴五博鮒比熟」がある。師氏は「王詩は虛筆を多用し、裴詩は實寫に偏って」おり、「王維は藝術的な想像の助けを借りて、景物の神韻を表現し、“虛”の境界を明らかに示すことに長じていた」とする。そして、裴迪同詠には見られない、王維の「輞川集」の藝術的特徴は、「虛實を結びつける藝術的表現技法を採用した」點であるとする。この分析結果は、入谷博士の指摘とほぼ一致している。入谷博士や師長泰氏の指摘するように、裴迪の詩は藝術的想像力を缺いた、現實をそのまま描寫するような作品と言っ

てよいだろう。どう見ても王士禎の言う、王維の作と「工力悉く敵ふ」ような代物ではないのである。

では、裴迪の同詠には、全く取柄がないのであろうか。特色も個性も見られないのであろうか。

四、裴迪同詠の特色について

ここで「輞川集」裴迪同詠にみられる特色や個性について考えてみたい。

「北垞」

王維：北垞湖水北、雜樹映朱欄（起・承）

裴迪：南山北垞下、結宇臨欽湖（起・承）

起句では、兩者とも北垞の地理状況を詠う。ただ、王維が「輞川集」において地理的状况を詠うのはこの「北垞」詩のみである。一方、裴迪は他の同詠においても、景物・景勝地の位置関係や地理状況を説明することがある。

文杏館 王維

文杏栽爲梁 文杏 栽ちて梁と爲し

香茅結爲宇 香茅 結んで宇と爲す

不知棟裏雲 知らず 棟裏の雲

去作人間雨 去って人間の雨と作るかを

裴迪

迢迢文杏館 迢迢たり文杏館

躋攀日已屢 躋り攀ぶること 日に已に屢しばなり

南嶺與北湖 南嶺と北湖と

「輞川集」に關する二三の問題（上）（内田）

前看又廻顧 前に看 又た廻顧す

裴迪同詠の「迢迢」「躋攀」という詩語によって、文杏館が高い場所に建てられたものとわかる。そこではじめて、王維の「不知棟裏雲、去作人間雨」という表現も、決して誇張ではない、より確かなものとなるわけである。さらには、文杏館が南嶺と北湖の間に存在するという位置関係も判明する。位置関係への言及の中で、道筋を描寫した表現も見られるので次に挙げておきたい。

門前宮槐陌、是向欽湖道（「宮槐陌」）

一逕通山路、行歌望舊岑（「斤竹嶺」）

瀨聲喧極浦、沿涉向南津（「樂家瀨」）

さて、輞川莊内で身内や限られた心友・道友と雅遊を楽しんだ王維ではあるが、「輞川集」の各詩を作るにあたって、第三者（不特定多数の鑑賞者）の存在は、當然念頭にあったものと推測される。また、廣壯な輞川であるから、當時であっても、莊内の情況に知悉している人間は少なかつたであろう。

そこで必要となってくるのは、いわば道案内役の存在である。裴迪の道案内によって、「輞川集」を味讀する我々は、よりスムーズに莊内を歩むことができるわけである。

王・裴の詩を仔細に比較検討していくと、裴迪が王維の詩

中國詩文論叢 第二十三集

の内容を、補足ないしは説明しているように思われる部分が見られる。裴迪の詩によって、王維の詩の抽象的な部分が判然とする場合もある。

「茱萸泝」で王維はこう詠う。

結實紅且綠 實を結んで紅にして且つ緑

復如花更開 復た花の更に開くがごとし

山中儻留客 山中 儻し客を留めんとすれば

置此茱萸杯 此の茱萸の杯を置かん

茱萸が色とりどりの實をつけ、まるで花が咲いたかのようなであることを描寫するが、茱萸の生えている岸邊の様子にはふれていない。一方、裴迪は次のように詠う。

飄香亂椒桂 飄香 椒桂亂れ

布葉閒檀欒 葉を布きて檀欒に閒はる

雲日雖廻照 雲日 廻照すと雖も

森沈猶自寒 森沈として猶ほ自から寒し

茱萸泝には茱萸だけでなく竹も生えているようであり、深く茂った邊りでは、日が射しても寒い様子がこの詩からわかる。

「宮槐陌」で王維は

仄徑蔭宮槐 仄徑 宮槐に蔭はれ

幽陰多綠苔 幽陰 綠苔多し

應門但迎掃 應門 但だ迎掃するは

畏有山僧來 山僧の來る有るを畏れしならん

と詠んだ。後半部分では、門番が山寺の僧侶の來訪を敬って掃除をしている様子が詠われている。一方、裴迪同詠の後半二句。

秋來山雨多 秋來 山雨多く

落葉無人掃 落葉 人の掃ふ無し

この二句を讀んで初めて、門番があわてて掃き清めなければならぬほど、雨を含んだ夥しい落葉が手付かずのまま散り積もっている様子をイメージできるのである。王維と裴迪の詩が美しく響きあうのを我々はここに感ずることができよう。

入谷博士は『王維研究』において「裴迪の同詠は何のために存在するのか」という疑問について、兩者の詩を組み合わせることに、輞川莊の現實を生かしたまま理想化するといふねらいがあったと考え、それは、「藝術家としてのものとも眞摯な友情と、最高度の謙虛さの所産」であるとする。それが、はじめから兩者によって企圖されたものなのかは、些か疑問であるが、結果的に幻想と現實が融合する詩集が生まれたことは間違いない。

王維が抽象的・観念的世界を詠う傾向にあるのに對して、裴迪は輞川の景勝のありさまを、より具體的・個別的に詠う傾向にあるといえよう。前述の師長泰氏言うところの「實寫」である。そして、その傾向は、恐らくは意圖したものであるというより、當時の裴迪の創作水準のしからしむるところではなからうか。

このように、裴迪の「輞川集」同詠には、結果的に王維の詩と相呼應し補完的役割を果たすような佳作もある。しかし、王維の模倣に終始しているものの、模倣しきれていない、稚拙な印象を受ける作品が多いことも事實である。では、この「輞川集」同詠に見られる模倣性・補完性は、他の作品にも見られる特徴なのであろうか。裴迪の詩はどれも稚拙なのであろうか。

五、「輞川集」以外の裴迪同詠の文學的水準

次に、王維の作品に裴迪や他の人々の同詠が伴う作例をみていき、「輞川集」同詠にみられる裴詩の特徴が表れているかを考察したい。まず、「青龍寺曇壁上人兄院集」をとりあげる。この詩は、王維が王昌齡・弟王縉・裴迪を伴って曇壁上人の山院に参詣した折の作品である。

「輞川集」に關する二三の問題（上）（内田）

高處敞招堤	高處 招堤敞く	王維
虛空詎有倪	虛空 詎ぞ倪 <small>（なん）</small> つこと有らん	
坐看南陌騎	坐して看る 南陌の騎	
下聽秦城雞	下りて聽く 秦城の雞	
渺渺孤烟起	渺渺として孤烟起り	
芊芊遠樹齊	芊芊として遠樹齊し	
青山萬井外	青山 萬井の外	
落日五陵西	落日 五陵の西	
眼界今無染	眼界 今 染無し	
心空安可迷	心は空なれば 安んぞ迷ふべけん	

林中空寂舍	林中 空寂の舍	王縉
階下終南山	階下 終南山	
高臥一牀上	高臥す 一牀の上	
廻看六合間	廻看す 六合の間	
浮雲幾處滅	浮雲 幾處か滅 <small>（き）</small> ゆる	
飛鳥何時還	飛鳥 何れの時か還る	
問義天人接	義を問へば 天人接し	

同詠 王縉

中國詩文論叢 第二十三集

無心世界閑 心を無にすれば 世界閑なり
誰知大隱客 誰か知らん 大隱の客の
兄弟自追攀 兄弟 自ら追ひ攀づるを

同詠 王昌齡

本來清淨所 本來 清淨の所
竹樹引幽陰 竹樹 幽陰を引く
簷外含山翠 簷外 山翠を含み
人間出世心 人間 世心を出づ
圓通無有象 圓通 象有ること無く
聖境不能侵 聖境 侵す能はず
眞是我兄法 眞に是れ 我が兄の法
何妨友弟深 何ぞ友弟の深きを妨げん
天香自然會 天香 自然に會し
靈異識鐘音 靈異 鐘音に識る

同詠 裴迪

靈境信爲絕 靈境 信に絶たり
法堂出塵氛 法堂 塵氛を出づ
自然成高致 自然 高致を成し

向下看浮雲 下に向かひて浮雲を見る
逶迤峰岫列 逶迤として 峰岫列なり
參差閭井分 參差として 閭井分かる
林端遠堞見 林端 遠堞見はれ
風末疎鐘聞 風末 疎鐘聞こゆ
我師久禪寂 我が師 久しく禪寂し
在世超人群 世に在りて人群を超えたり

まず、三人の同詠について簡単に見ていきたい。各詩人と、大筋で王維の詩の流れをふまえる。王維が冒頭の二句で寺院の環境を詠うと、他の詩人たちもそれに倣っている。例えば第三・四句で、王維が「坐して見る 南陌の騎、下りて聞く 秦城の雞」と俗界を見下ろすと、裴迪は「自然 高致を成し、下に向かいて 浮雲を見る」と下方を見下ろす。王維も「高臥す 一牀の上、廻看す 六合の間」と山院からあたりを見回している。第五句〜第八句では、王維と裴迪が遠景描寫をするが、王昌齡は第五〜第八句で「圓通」「聖境」といった佛教用語を用いながら上人を稱えている。王維は第五・六句で遠景を詠い、第七・八句では曇壁上人を稱える。王昌齡も王維も佛教思想に基づいて、この四句を詠んでいる。

末二句で、王維は己の心境・境地を詠う。これは、王維の佛教詩によく見られる特徴である。王昌齡の「天香 自然に會し、靈異 鐘音に識る」も、山院で自らが感得したものを詠じているのであろう。裴迪は心境を詠わず、「禪寂」の語を用いて上人を禮贊して締め括っている。注目すべきは王縉である。「誰知大隱客、兄弟自追攀」——さしもの優れたあなたでも、おわかりではなかったでしょう、市井に隠れ住む「大隱」の我々兄弟が、あなたの徳を慕って、こうして登ってこようとは。兄王維が、市井に住んで俗衣を身にまといながら三界から超越している「維摩詰」を目指して修行していることから、特に「大隱」の語を用いたのであろう。顧起經『類箋唐王右丞詩集』では、「謂右丞（右丞を謂ふ）」と注して、「大隱」を王維に限定する。だが、兄王維とともに自分も「大隱」であると自任しているとも解釋でき、やや傲慢ともとられかねない表現である。後に宰相にまで榮進することになる人間の、矜持の高さを窺わせるものである。

三者の詠みぶりを見ると、いずれも王詩の展開を模倣しながらも、それぞれの個性が反映された作品であると言える。王昌齡は佛教用語を多用している點が指摘できよう。王縉はその詩に人柄が滲み出ており、ひとつの風格を備えている。

「輞川集」に關する二三の問題（上）（内田）

さて次に、裴迪同詠を、詩語や表現方法の點から考えてみたい。この同詠には、明らかに王維の影響を受けている表現が認められる。まず、冒頭二句「靈境信爲絕、法堂出塵氛」は、王維若年の作「桃源行」の「不疑靈境難聞見、塵心未盡思鄉縣（靈境の聞見し難きを疑はざるも、塵心未だ盡きずして郷縣を思ふ）」を想起させる。王維の「桃源行」は、原注に「時年十九（時に年十九なり）」と記されている若書きであるから、裴迪がその詩句を模倣した可能性は低くない。

次に、第五、第七句「逶迤峰岫列、林端遠堞見」は、王維の「輞川集」北坨の「逶迤南川水、明滅青林端（逶迤たり南川の水、明滅す青林の端）」との類似性を強く感じさせる。假にこの作品が「輞川集」以後のものであるとするならば、次のような推測も成り立つであらう。裴迪は「逶迤峰岫列……」と詠じたところで、王維の「北坨」の一節を思い出し、續けて「林端遠堞見（遠くにある堞（城壁）の上に建てめぐらした垣）が林の端にちらりと見える」と詠んだのではないかと。

また、第八句「風末疎鐘聞」は王維流の表現である。王維が輞川で詠んだと思われる三首に「疎鐘（閑遠に響く鐘）」の音を聞く描寫が見られる。

唯有白雲外、疎鐘聞夜猿

中國詩文論叢 第二十三集

〔酬盧部蘇員外過藍田別業不見留之作〕

谷口疎鐘動、漁樵稍欲稀 〔歸輞川作〕

寒燈坐高館、秋雨聞疎鐘

〔黎拾遺听裴迪見過秋雨對雨之作〕

この三首は、その制作年代をはっきりと特定できないが、王維が輞川の地で「疎鐘」を聞くことを好んで描寫していることは確かである。

第九句の「禪寂」は佛教用語で、靜かに瞑想すること。

「坐禪」と同義である。『無量義經』德行品に「其心禪寂、常在三昧（其の心は禪寂にして、常に三昧に在り）」、『維摩經』方便品に「一心禪寂、攝諸亂意（一心禪寂して、諸の亂意を攝む）」とそれぞれ見える。「禪寂」の語も、王維若年の作に一例ある。

愛染日已薄、禪寂日已固 〔偶然作〕其^(一)

この裴迪同詠の中で佛教用語はこの「禪寂」一語のみである。王維の影響を多分に受けた身であれば、佛教の教義についても薰陶を受けていた可能性が高い。しかし、この同詠において、佛教思想に根ざした内容があまり見られないのは、一つの疑問點として注意しておく必要がある。

末句の上人を稱える「在世超人群（人間界にありながらも

（その心は）人から超越している）」という表現は、王昌齡の「人間出世心（この山院は人の世にあるけれど、ここに来ると名利の心を脱する心地がする）」と類似した表現であり、昌齡の句をふまえているのだろう。

「青龍寺」詩の裴迪同詠では、王維の舊作をふまえたり、同行した王昌齡の詩句を言い換えたりする表現が見られた。また王維好みの詩語を用いている箇所も見受けられた。ただここで注目すべきは、「輞川集」同詠とは異なり、王維の詩の單純な模倣・なぞりが全く見られないことであろう。「輞川集」同詠に見られる單純な模倣や補完性は、ここではすっかり影をひそめている。「輞川集」同詠と比較してみると、同じ人物による作品とも思われぬほどである。この歴然とした差異は、詩人の著しい進歩の跡と見てよいのではあるまいか。とすると、この詩は「輞川集」以後の作と看做すのが妥當ではないだろうか。

次に王維が弟王縉・盧象・裴迪とともに内弟の崔興宗を訪ねた折の作品と三人の同詠を見てみることにする。

與盧員外象過崔處士興宗林亭

盧員外象と崔處士興宗の林亭に過る 王維

綠樹重陰蓋四鄰 綠樹 重陰 四鄰を蓋ひ
青苔日厚自無塵 青苔 日びに厚く 自から塵無し
科頭箕踞長松下 科頭 箕踞す 長松の下
白眼看他世上人 白眼 看他す 世上の人

同詠 盧象

映竹時間轉轆轤 竹に映じて時に轆轤の轉ずるを聞き
當窓只見網蜘蛛 窓に當りて只だ蜘蛛の網するを見る
主人非病常高臥 主人 病に非ずして 常に高臥す
環堵蒙籠一老儒 環堵 蒙籠す 一老儒

同詠 王縉

身名不問十年余 身名 問はざること 十年の余
老大誰能更讀書 老大 誰か能く更に書を讀まん
林中獨酌鄰家酒 林中 獨り酌む 鄰家の酒
門外時間長者車 門外 時に聞く 長者の車

同詠 裴迪

喬柯門裏自成陰 喬柯 門裏 自から陰を成し

「輞川集」に關する二三の問題（上）（内田）

散髮窓中曾不簪 散髮 窓中 曾て簪せず
逍遙且喜從吾事 逍遙 且喜^{しやき} 吾が事に從ひ
榮寵從來非我心 榮寵 從來 我が心に非ず

三人の同詠いづれも王維の詩に倣って對句が用いられている。王維の詩と王縉同詠は後對格、盧象同詠は前對格、そして裴迪同詠は全對格の詩である。王維以下みな、崔處士の、俗世や俗利に超然として自由に生きる姿を稱えた内容であることで共通している。

次に、裴迪の同詠について詳しく見てゆく。「喬柯門裏自成陰、散髮窓中曾不簪」——門の中には高い木の枝が茂り、自然と木陰ができてゐる。崔處士は俗世を離れ、いままで冠簪をつけたこともない。これは對句であり、敢えて對句らしく訓讀するならば、「柯を門裏に喬くして 自から陰を成し、髮を窓中に散じて 曾て簪せず」となる。王詩には「箕踞」「白眼」の語があり、崔處士を阮籍になぞらえていると解る。よって裴迪は王詩をまね、『晉書』阮籍傳の「散髮箕踞」をふまえて「散髮窓中」と詠っているかに一見思われる。しかし、それでは「窓中」がピンとこない。「散髮窓中」は、おそらく『後漢書』卷四十五の袁閎傳をふまえているのである。

中國詩文論叢 第二十三集

う。袁閔は、後漢末に黨錮の禍を避け、死ぬまで土室に住んだ隠者。袁閔傳には次のようにある。

延熹末、黨事將作、閔遂散髮絕世、欲投迹森林。以母老不宜遠遁。乃築土室、四周於庭、不爲戸、自牖納飲食而已。旦於室中東向拜母、母思閔、時往就視。母去、便自掩閉、兄弟妻子莫得見也。……(中略)……潛身十八年、黃巾賊起、攻沒郡縣、百姓驚散、閔誦經不移。賊相約語不入其閭、鄉人就閔避難、皆得全免。年五十七、卒於土室。

(延熹の末、黨事 將に作らんとするや、閔 遂に髮を散じて世を絶て、迹を森林に投ぜんと欲す。母老いたるを以て遠く遁るるを宜しとせず。乃ち土室を築き、庭に四周し、戸を爲らず、牖より飲食を納るるのみ。旦に室中に於て東に向きて母を拜す。母 閔を思ひ、時に往き就きて視る。母去りて、便ち自ら掩閉し、兄弟妻子 見るを得る莫きなり。……(中略)……身を潛むること十八年、黃巾の賊 起こり、攻めて郡縣を沒し、百姓 驚き散ずるも、閔 經を誦して移らず。賊 相ひ約し語りて其の閭に入らず。郷人 閔に就きて難を避け、皆な全く免るるを得たり。年五十七にして、土室に卒す。)

土室に隠れ住んだ袁閔は、入り口の扉を設けずに、ただ「牖」から飲食物を土室の中へ取り込んだ。母が來ると(牖、

ごしに)會い、母が歸ると自分でその牖を閉じ、兄弟妻子とも會わなかったという。裴迪同詠に「窓中」とあり、盧象同詠にも「當窓只見網蜘蛛」とある。「窓」をことさらに用いているのは、崔處士を、窓しかない土室に住んだ袁閔になぞらえているからであらう。さらに、盧象の句「環堵蒙籠一老儒」や王綰同詠の「老大誰能更讀書」「林中獨酌鄰家酒」もまた、黃巾の亂が起きても獨り經書を誦し、土室に籠って逃げようとしなかった袁閔を彷彿とさせる表現である。

王詩では阮籍の故事をふまえるが、袁閔傳はふまえていない。裴迪は、おそらく盧象の同詠を參考にして「散髮窓中曾不簪」と詠んだのであらう。裴詩前半の對句は、同行者の同詠に見劣りしない整然とした印象を與える。

裴迪同詠の後半部分。「逍遙且喜從吾事、榮寵從來非我心」——こうしてきままに暮らすと、喜ばしいことに自分のしたい事ができる。(だから仕官して)君主から寵愛を受けようなどとは、いまだかつて考えたことが無い。前半二句に續いて後半も對句。ただ、「從吾事」と「從來」で「從」字が重複し、「吾事」に「我心」を對應させるといった點で、やや未熟さを露呈している。しかし全對格の絶句を作ろうとしたことには、意義深いものがあろう。

本來、絶句は流動感や余韻を表現するのに適した詩型である。絶句の中で對句を用いると、バランスがとれすぎて、その流動感を阻害しかねない。ところがここでは、十年以上もじつと竹林の中に暮らし続けている崔處士を詠じているので、安定感のある對句を用いて何ら問題はないわけである。わずかな瑕疵があるものの、この同詠もまた、「輞川集」同詠の文學水準とは全く異なるものと言えるのではあるまいか。

六、「輞川集」成立時の裴迪

裴迪は「輞川集」同詠を制作するにあたって、王維の詩を懸命に模倣したものの、稚拙な作品を並べるしかなかった。ところが、「青龍寺」詩や「過崔處士興宗林亭」詩の同詠においては、これが同一人物の作品かと思わせるほどの飛躍を遂げたものと考えられる。人は精進すれば、日々成長し進歩するものである。しかし、その成長の度合いも、若年と中年では大きな違いがある。若ければ若いほど、知識を吸収する質量は大きく速度も速いわけである。

そこで氣になることは、それぞれの同詠を制作した時、いったい裴迪は何歳であったのか、ということである。

裴迪の生年や出自については、いまだ定説を見ない。裴迪

「輞川集」に關する二三の問題（上）（内田）

の生年を開元四年（七一〇）とする説がある。例えば、莊申『王維研究 上』⁽⁹⁾には、「據『唐詩品彙』、裴迪是關中人。生於開元四年（七一〇）、卒年無考。」とある。しかし、楊文雄『詩佛王維研究』⁽¹⁰⁾が指摘するように、通行の『唐詩品彙』には裴迪の生年は記されていないし、開元四年生とする根據が不明である。假にこの説に従うならば、裴迪は王維より十七歳も年少となる（生年六九九年説の場合）。

入谷仙介・伊藤正文兩氏は、『唐書』宰相世系表（卷七一上）の洗馬裴氏の項に見える任城の尉・裴回の長男迪をこの裴迪と考える。⁽¹¹⁾王維の作品に、裴回の墓誌銘「故任城縣尉裴府君墓誌銘」があることもその證左としている。伊藤氏は、「王維はその生涯を通して、血縁・地縁を特に重んじた人であった」とし、王維が裴迪と交友した背景には地縁關係が存在するとする。王維と裴迪の深い交友關係を考えると、この説の蓋然性は高いものと言わざるを得ない。假に裴迪が、天寶二年（七四三）正月に三十九歳で死去した裴回の子であるとすると、裴迪は王維よりも二十歳以上年少となる。

では「青龍寺」詩同詠の制作時、裴迪は何歳ぐらいであったのか。陳鐵民『王維集校注』では、「青龍寺」詩を天寶二年ごろの作とする。だが裴迪が裴回の子と假定するならば、

裴迪は父の死去によって、天寶二年よりあしかけ三年（二十五ヶ月）の喪に服したであろう。いくら寺院とは言え、父の逝去した年に「青龍寺」を訪れたとは考え難い。王維の序文の「經行之後、跣坐而閑。升堂梵筵、餌客香飯。不起而遊覽、不風而清涼（經行の後、跣坐して閑なり。堂に升れば梵筵あり、客に餌するは香飯。起たずして遊覽し、風ふかずして清涼なり）」には、知人を失った悲しみやその遺児を伴って參詣する無常とは全く無縁の心境が表現されている。他の同詠や裴迪本人の同詠にも、追悼の気分は全くない。

傳璇琮「王昌齡事迹考略」⁽¹²⁾では、江寧丞であった王昌齡は天寶二年か三年の春ごろに長安にいたが、どのくらい滞在したかはわからないとする。また、昌齡が龍標尉に左遷されたのは、最も早くて天寶二年か天寶三載の秋で、おそらくはそれ以後數年の間の秋であると見る。ひとまず傳説に従って推測する。「青龍寺」詩制作時期は、裴迪の父の喪があけて以降、王昌齡の龍標左遷以前であるから、天寶四載〜五載（七四五〜七四六）と推測されよう。時に裴迪、十代半ばかり後半の少年である。前述の、「青龍寺」裴迪同詠において、佛教思想に根ざした内容がなせ詠われないのかという疑問もここで水解する。制作時の年齢を考慮すれば、佛教教理に對す

る理解がまだ浅いであろうことは容易に推測されるからである。

次に「崔處士興宗林亭」詩同詠の制作時期。陳鐵民『王維集校注』⁽¹³⁾では、天寶八、九載（七四九〜七五〇）ごろと考證する。『後漢書』袁閎傳をふまえつつ、難しい全對格的絶句をものしており、王維の模倣も無いことから、「青龍寺」詩以後の作とするのが穩當なところであろう。

さて、裴迪の「青龍寺」詩同詠および「崔處士興宗林亭」同詠は、「輞川集」同詠の作詩水準を明らかに上回っていることはさきほど確認した通りである。とすると、「輞川集」を、「青龍寺」詩や「崔處士興宗林亭」詩以後の作品とするのは、甚だ不自然である。とするならば、裴迪が「輞川集」同詠を制作したのは、十代前半から半ばごろとなるであろう。作品に藝術的想像力が乏しく、稚拙で、王維の模倣に終止しているのも當然であろう。

裴迪は王維の文學を模倣しながら詩作に精進していた、一方の王維は裴迪に對して深い愛情を注いだ。裴迪が王維の友人裴回の子であるならば、王維は當然その子を應援したであろうし、裴回亡き後は、裴迪を立派に成人させ、科擧に登第させようとしたであろう。「山中與裴秀才迪書」では「天機

清明者」と褒め上げ、科擧に失敗したのか不満げな裴迪には、「酌酒與君自寬……不如高臥且加餐」「酌酒與裴迪」と勵ます。そして、遠く離れた裴迪には「日日泉水頭、常追同携手……復歎分襟、相憶今如此、相思深不深」「贈裴迪」と、追憶と感傷を込めつつ馳念しているのである。

王維は、ある時期確かに裴迪と輞川の景勝を巡り、詩を賦し、語りあったはずである。ところが、「輞川集」に登場する人物といえ、目に見えぬ「來者（未來の輞川莊の所有者）」「孟城坳」や「人語響（こだま）」「鹿柴」であり、點景人物の「應門（門番）」「宮槐陌」や「夫君（友人）」「欽湖」である。詩中の作者と交流するのは、聲を發しない「上客（立派な客）」「臨湖亭」ぐらいのもの。ともに雅遊する裴迪はどこにも現われないのだ。「辛夷塢」に「寂無人（寂として人無し）」とあるが、それは「辛夷塢」のみならず、「輞川集」全體を通じて言えることで、人の氣配が無いに等しい。

なぜ、そのようなことが起こりうるのか。それは、王維が「輞川集」において「輞川莊を現實から隔絶された幻想的な世界として構築⁽¹⁴⁾」しようとしたからなのかもしれない。だが、もっと現實的な話として、當時の裴迪は前述のごとく十代前半から半ばの少年であって、王維と二十歳以上の年齢差があっ

「輞川集」に關する二三の問題（上）（内田）

た。王維からみれば、子供のような存在であったわけ、この二人に詩人同士の交流が果たして成り立ったかどうか、甚だ疑問である。王詩において兩者の交遊に筆が及ばないのも、尤もなことではないだろうか

王維の「山中與裴秀才迪書（山中より裴秀才迪に與ふるの書）」の一節にこうある。

足下方溫經、猥不敢相煩。輒便往山中憩感配寺、與山僧飯訖而去。北涉玄灞、清月映郭、夜登華子岡、輞水淪漣。與月上下、寒山遠火、明滅林外。深巷寒犬、吠聲如豹、春墟夜舂、復與疎鍾相聞。此時獨坐、童僕靜默。多思曩昔、携手賦詩、步仄逕、臨清流也。

（足下 方に經を溫へば、猥りに敢へて相ひ煩らわさず。輒便ち山中に往きて感配寺に憩ひ、山僧と飯ひ訖はりて去る。北のかた玄灞を涉れば、清月 郭に映じ、夜 華子岡に登れば、輞水は淪漣たり。月と與に上下すれば、寒山の遠火は、林外に明滅す。深巷の寒犬、吠聲 豹のごとく、春墟の夜舂、復た疎鍾と相ひ聞る。此の時 獨坐するに、童僕は靜默す。多く思ふは曩昔、手を携えて詩を賦し、仄逕を歩み、清流に臨みしことなり。）

「足下方溫經」とあるので、この時、予備試験の郷試に合

中國詩文論叢 第二十三集

格して「秀才」と呼ばれていた裴迪は、科擧の本試験を目指して經書の勉強中なのであろう。

「仄逕」は恐らく宮槐陌、即ち欽湖に向う道であらう。「輞川集」では「仄逕宮槐陌……」と詠われている。「明滅林外」は「輞川集」北垞の「明滅青林端」を想起させる。そして「多思曩昔、携手賦詩、步仄逕、臨清流也」とあり、かつて輞川の雅遊を楽しみ、共に詩を詠じたことを王維がしみじみと追憶し、また裴迪にも思い出させようとしているような印象を与える。この表現から、「輞川集」成立は、この「山中與裴秀才迪書」成立以前であると考えるのが自然であらう。「曩昔」がどれほど以前を言うのか難しいところだが、「多思」とあるので、少し以前のことではないものと思われる。

前述の裴迪同詠の水準比較とあわせて考察するに、「輞川集」は裴迪の郷試合格以前、おそらくは十代半ばごろとみるのが穩當なところではあるまいか。さらに、裴迪同詠は、王維の指導のもとで作られた「習作（エチュード）」と見ることができよう。

ではなぜ王維はその習作二十首を、同詠として「輞川集」の中に入れたのであろうか。王維が裴詩の水準を認識できな

いはずはない。裴迪の年齢や科擧受験という當時の状況を考え合わせれば、その疑問は解けるように思われる。王維は若年の裴迪の詩的名聲を高め、ゆくゆくは科擧に合格させようとしたのであろう。五言絶句という形式を用いたのも特に意味があつてのことであらう。『冊府元龜』に「王維有俊才、尤工五言詩。獨步於當時、染翰之後、人皆諷誦（王維 俊才有りて、尤も五言詩に工なり。當時に獨歩し、染翰の後、人皆な諷誦す）。」とあるように、當時、王維の五言詩はとりわけ評價が高く、詩を作ればたちどころに人々の口の端に上つたようである。無名の詩人を江湖へ紹介しようとするれば、自らも得意とし、社會的聲價の高い形式を用いるのは當然であらう。

「輞川集」に無名詩人裴迪の同詠を入れたことは、裴迪を引き立てようとする、王維の具體的行爲と看做すことができるのではないか。科擧受験ともなれば、事前にその詩的名聲を高めておくことは、有効な手段であつたらう。王維集に収載される若書きの「過秦始皇墓」「題友人雲母障子」の二作品は、宋本に見える原注から王維十五歳の作と考えられる。王維は自らの受験経験に基づき、十代半ばの裴迪の作品を要路の人々に紹介したものと思われる。王維は裴迪が自作を模倣することを認め、一方、裴迪は王維の詩をなぞることで世

に出ようとしてのであろう。傳統を重んじる中國では、亞流たることは必ずしも非價值を意味しない。まして、すでに詩名の高かった王維の亞流であれば、それは十分に賞賛の對象となり得たはずである。後代、同詠を酷評した劉須溪も、裴迪の年齢を知れば、必ずや絶賛したに違いない。

七、結語

なぜ、「輞川集」裴迪同詠は、王詩の極度な模倣に終始しているのか。なぜこれほど稚拙な詩を王維は「輞川集」に入れたのか。それは、この同詠が裴迪の若年に王維の指導の下で作られた習作だからであらう。作品の稚拙さは、その制作時期の年齢によるものであり、その文學水準をもって詩人裴迪を評價すべきではない。

王維が裴迪の將來を考え、社會的・文學的に庇護していたことは、殆ど疑問の余地がない。自詠と裴迪同詠を組み合わせ、さらに「序」までつけて「輞川集」という體裁にしたのは、裴迪の詩名を高めようと意圖したからであると判斷されよう。「輞川集」の成立はその具體的行爲であったと見るのが妥當であらう。王維も若年の頃、貴顯の引き立てによって長安での名聲を博した。恐らく王維は、若き裴迪にかつての

自分の姿を見ていたのであろう。

王維の願いが當時どれだけ達成されたかは、やや疑問である。しかし事實として、この輞川同詠によってこそ、裴迪は文學史上名を留める結果になっている。少なくともその點では、王維の願いは充分叶えられたのだと言ふべきであらう。

八、注

本稿では王維の詩およびそのグループの詩人の同詠について、靜嘉堂宋本『王右丞文集』を底本とし、適宜諸本と校勘した。

注

- (1) 『王維研究』創文社、一九八一年
- (2) 「獨住」という詩語については、王維が好んでいた可能性も考えられよう。王維の詩友・儲光羲の詩にも「貽閭處士居終南」の「此時方獨住」を含む四例がある。
- (3) 顧元緯本外編・趙殿成本外編・『全唐詩』等に收載される「山行」詩(『全唐詩』では「闕題」一首)其二に、この王・裴の句と類似する「空翠濕人衣」が見える。
- (4) 師長泰主編『王維研究』第二輯(中國・三秦出版社、一九九六年)所收

中國詩文論叢 第二十三集

- (5) 拙論「安禪制毒龍」考——王維の佛教詩における實踐性について『中國詩文論叢』第十集、中國詩文研究會、一九九一年）參照。
- (6) 拙論「王維における維摩詰的生活——半官半隱の思想を中心に（『中國詩文論叢』第七集、中國詩文研究會、一九八八年）參照。
- (7) 陳鐵民氏は『王維集校注』（中華書局、一九九七年）において、この「偶然作」を開元十五年頃の作とする。その検討は今措くとしても、同じ其三の詩中に「小妹日成長、兄弟未有娶（小妹 日びに成長し、兄弟 未だ娶る有らず）」とあるので、王維若年の作として問題なからう。
- (8) 靜嘉堂本では「空中」に作り、「一本作窓」と注する。蜀刻本では「窓中」に作る。この部分が袁閔傳をふまえて詠まれているとすれば、「空中」ではなく「窓中」に作るべきである。
- (9) 香港・萬有圖書公司、一九七一年
- (10) 臺灣・文史哲出版社、一九八八年
- (11) 注（1）所掲の入谷仙介『王維研究』四五五ページ・伊藤正文『審美詩人 王維』（集英社、一九八三年）八六ページ。傳璇琮『唐代詩人叢考』（中華書局、一九六六年）所收。
- (12) 注（7）所掲書。
- (13) 注（7）所掲書。
- (14) 注（1）所掲書。
- (15) 靜嘉堂宋本では、「足下方溫經」の經を「維」に、「北涉玄

灞」の北を「比（このころ）」に、「復與疎鍾相聞」の間を「聞」に、それぞれ作る。靜嘉堂宋本のこの三字は、誤刻の可能性が高い。

【追記】筆者は、深圳大學中國文化與傳播系から指名の執筆依頼を受け、『文化與傳播』第一輯（上海文化出版、一九九三年）に小論「輞川集」集成之探析」を發表した。その論文では、王維が自詠と裴迪同詠を組み合わせて「輞川集」という體裁にしたのは、年少の裴迪の科學受験を視野に入れた一つ、裴迪の詩名を高めようという意圖があったからではないか、と結論づけた。

本論では、この「輞川集」集成之探析」を基にして、別な材料による補強と新知見を加えた。輞川集制作時の裴迪の年齢については若干修正した。十數年前には「試論」の心算で執筆したが、現在に至つても、當初の考えとその方向性に於て全く變わっていない。稚拙ではあるが、古い「詩論」の方も併せてご覧頂ければ幸いである。なお『文化與傳播』第一輯の目次は、<http://wxy.szu.edu.cn/result-B1.htm>（深圳大學文學院學術成果）を参照されたい。